

南洋第四支隊

サトワン島守備

広島県 呉町 富雄

私は大正十年十月十三日、広島県双三郡田幸村大字木乗一九九（現三次市木乗一九九）で農家の長男として生まれました。父は私が十二歳のときに死亡したので、私が家長となり、母が親権者として家の経営をしていました。家族は母、弟二人、妹三人、祖母の八人でしたので、母を中心として私、妹と、作男の八人が協力していたのです。

そのような家庭事情でしたが、女手一つの母は私を農業学校へ通わせ、卒業後は青年学校へも出してくれました（そのお陰で軍隊では随分助かりました）。

昭和十六年徴集で徴兵検査を受けました。第二乙種で補充兵でしたが、現役兵より早い昭和十六年十二月二十二日召集令状が来て、一月五日入隊となったので

す。しかし、その間に「軍人勅諭」も暗記してしまいましたし、大東亜戦争勃発という当時の状況から、軍隊に関する知識も学んでいました。母と妹が祖母と弟妹を養いつつ、女手で農業を営みながら生活しなければならぬと、後ろ髪を引かれる思いはありましたが覚悟を決めておりました。

入隊は松江の西部六十四部隊（歩兵第百四十二連隊）第二中隊（田中隊）の擲弾筒班でした。三カ月の教育を受けましたが、補充隊のため古参兵は少なく、初年兵の半数は何回かに分けて戦地に行き、擲弾筒班で残った者は少なかったのです。

昭和十七年四月、現役兵が入営（私と一緒に徴兵検査を受けた人たち）するので、私は未だ初年兵で三カ月余早く入隊したわけですから、例えば体操教範など覚えるのに苦労しました。覚えるということは、教えられる者より何倍か苦労があることを知りました。

班長は召集の軍曹で擲弾筒のことはよく分からない。そのため、夜には逆に班長に擲弾筒のことを教えました。先に申しましたとおり、青年学校や中等教育を受

けていたのが役に立ったのです。人事係准尉の方は私を下士官候補者にと思っていたようですが、母子家庭で長男という事情を考えて強くは薦めなかったのでありましょう。

班内には古参兵が一人いましたが、ほとんどの古兵は転属していました。私は一選抜で、一年で上等兵になったので、それまでは少しはいじめられました。しかし、私は内地で昭和十七年一月から同十八年十二月十五日まで、松江の原隊で中隊も同じだったため、中隊の神様といわれるようになり、一方責任も重くなりました。

戦局も厳しくなってきた、松江連隊（歩兵第一四二連隊）は全部出動し、南洋第四支隊となつて、南洋委任統治トラック島の西南、モートロツク諸島、サトワン、ヌクオロ、エタール環礁へと移動することとなりました。

昭和十八年十二月十五日、門司の田の浦で一週間民宿、荷を積み、二十三日宇品、二十四日佐伯湾出航、

兵員は歩兵六五〇人、小倉から戦車隊が編入し、我々の船には八百数十人が乗船、三船団ずつ出て計九船団。メレヨン島へ行く船は沈没してしまいました。

我々の「長野丸」は潜水艦の魚雷をよけながら航行、辛うじてトラック島の夏島へ寄港しました。その日は昭和十九年一月七日だったと思いますが、この時に部隊長は作戦命令を受けたと言います。

同年一月十二日、夏島発、十三日、東カロリン群島モートロツク諸島、十八日サトワン島に、本部、第一、第三中隊、砲隊、重機関銃、戦車、海軍が上陸、翌十九日に第二中隊がヌクオロ島に上陸しました。

サトワン島には既に飛行場ができていましたので、我々の任務はその守備でした。その後我々のサトワン島に対する米艦隊の攻撃が始まりました。巡洋船四隻他に駆逐艦など十七隻の艦砲射撃です。初めての体験でしたが、島の椰子、パンの木は途中から幹は切られてしまふ。敵艦の兵隊は煙草を喫いながら撃っているのです。

隣の第二中隊（田中大尉）のヌクオロ島に対しては

グラマンの機銃掃射のみで艦砲射撃はありませんでした。田中隊では敵が上陸するのではと、心配しながら本隊状況を見ていたということでした。

昭和十九年四月ころ、空襲する敵機に対し対空射撃していた海軍の防空部隊の兵隊は皆やられてしまった。以前からB 17、B 24などの爆撃は行われていたが、部隊長は射撃すれば目標になるだけだと判断して、対空射撃は駄目だとして撃たせぬようになった。その間敵の射撃によって、部隊の戦没者は陸軍五十四名、海軍二十七名であったといえます。

艦砲射撃も銃爆撃もありましたが、米軍はついに上陸しませんでした。六月になり、南洋支隊長（飛田正式大佐）命令で、田中隊は本隊に戻され、敵上陸のための防衛準備しました。

その当時、私は歩哨配置のため兵を連れて歩いて爆撃され、破片が^{すのう}図囊に当たりました。しかし、その中に木綿針を数十本まとめて入れてあり、そこに万年筆を挟んでいたが、破片はそこで止まり、怪我をしないで済みました。奇跡というか、水筒もかすり、帯革も

切れていました。

〔呉町さんは当時の図囊を持参され、破片の当たった跡、破片も見せられた〕

連合軍の爆弾は戦争後期になると、瞬発信管で水平に破裂するため、草も爆風と爆破で根元から薙ぎ倒すというか、切ってしまう。これは人員殺傷用のもので、小型爆弾であります。しかも、そのときは飛行場を横断中突如の空襲でしたから、遮蔽もできず、防空壕も無いのですから、文字通りの命拾い。木綿針と万年筆が命を助けたばかりでなく、傷も負わずに済んだのであります。後で周囲を見ると弾痕が沢山ありました。

敵は上陸して来なかったが毎日爆撃で、五百キロ爆弾の穴は池のようになる。また、あるときは、勤務が終了し銃の手入れをしていたとき、歩哨が対空射撃をしたため、陣地の場所を知られ爆撃を受けました。何しろ珊瑚の環礁の島のこととて海拔一・五メートルの陣地です。爆弾で防空壕の入口を塞がれ、埋められたこともあるのです。そのうちに友軍が救援に来て中に入っていた五〜六人の兵隊を助け出したこともありま

した。先ほど話をした艦砲射撃の後は空襲のみで、これは滑走路の修復妨害のためだったのかもしれない。後日、部隊長の指示で、対空射撃はやらす退避するようになりました。連合軍は、我々のような小さな島は、封じ込めて自滅させ、本土を目指して北上していった、と戦後知りました。

敵も上陸しないが、日本軍からの補給も無い。いくら節約しても先細りで心細い状態です。ですから木の芽、草を食べて生きなければならぬ。もし、終戦が遅れたら我々は全員餓死でしょう。

昭和二十年ころになると、敵との戦いというより、生きるための戦いでした。漁労によつて蛋白源とする。しかし、農耕は苦勞です。白い砂（珊瑚の）が多いので土をかき寄せ、ジャングルを切り開いて、甘藷一かますを食べず種芋にして、命令によつて食料増産に専念させられました。

私は中隊長直屬の指揮班にいて、夜、中隊長に農耕の教育しました。南瓜は一人三〇アール以上、生産物は毎月中隊へ供出する。優秀な班には椰子の実二個を

支給する。その椰子は沢山あったが、艦砲射撃でほとんど折られていたので貴重な植物となりました。

椰子は四百年ぐらい前から植えたというが、他の島から流れ着いたのか、細長い尖つたもの、丸みのあるものなど数種類ありました。島には島人は四百人ぐらいいた（周圀の島）という。南洋委任統治地で小学校もあり、日本語が分かるので助かった。現地人は他へ疎開させたので割合に少なかった。残つた現地人の食料を、日本軍が取らないようにと部隊長は厳しかった。南洋支隊の軍紀は厳しかった。衛生軍曹が木綿の褌を現地の人々にやつて降格されたこともあり、わずかに一本というが、これが官物であつたための処置で、軍紀は内地より厳しかったといえます。したがって当然兵器の手入れも厳格でありました。それほど厳しかったため、食料などの盗難は少なかったようで、命令は守られ統制はとれていました。終戦近くなつてから、特に艦砲射撃はなかったが、その後も軍紀は確立されていきました。

終戦のときは、中隊長から集合の命令が出て「終戦

となった……」と聞きました。我々は「負けたのか、本当のことらしい」と話し合ったりしましたし、通信兵からも「玉音放送があった」と聞きました。

大本營の発表と、現地での艦砲射撃を体験したのとは違っていたので、「そうだろう、我が軍の損害と連合軍の損害とは比較できない」「待ち続けていたトラック島からの救援も来ないし」「日本軍の飛行機は飛び上がって、降りて来るとメチャクチャになった」など、あれや、これやを思い合わせれば「負けたのか、本当のことらしい」が「本当だった」との実感が出てきました。後に分かったことですが、トラック島もやられたのだから救援に來ないのは当然でした。

呉町さんは、昭和四十七年に撮影された、サトウ島の破壊された飛行機の残骸を見せられた。

私たちの部隊は、柏第一二五〇一部隊で、終戦の昭和二十年十一月八日に浦賀に到着、十一日に上陸復員しました。南方の方は食料もなく、栄養失調や疾病による患者も多く、将兵が疲労困憊していることを連合

軍もよく知っていたようで、駆逐艦「春月」を復員船として早く帰還させたと聞いています。前にも申しましたが、終戦が遅れたならば、我々は艦砲射撃や銃爆撃による犠牲ではなく、栄養失調から餓死したことでしよう。

仏印インラン高射砲陣地

討兵団野島隊の想い出

富山県 大野 博

私は大正十一年十一月二十七日、富山県、現福岡町の農家で生まれ、甲種合格、富山第三十五連隊留守隊へ入り、第二十一師団より迎えに來られました。連隊本部はタイのバンコックで、入隊後初年兵教育を受け、警備や作戦とビルマ国境付近まで勤務をしました。

現在のベトナム当時の仏領印度支那で、第二十一師団（討兵団）、歩兵第八十二連隊第二大隊本部で終戦を迎えました。「国の為なにか惜しまぬ我が命 笑顔